
second online

どっくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

second online

【Nコード】

N3329Y

【作者名】

どつくん

【あらすじ】

友達とオンラインゲームを楽しんでいた平和な時間は突如終わりを迎えた。

夜鷹 潤はある朝目覚めると武装した人間に襲われる。そんな人が死んで当たり前の不法地帯へと変わった世界にいた。

神がデータを使って人々に力を与えた世界。

潤は突如として変わってしまった人生を取り戻すべく生き残るために様々な戦いに身を投じながら持ち前の洞察力とこの世界では存在例の無い滅龍能力を使って、データに支配されてしまった2つ目の

世界を生き抜いていく。

【与えよう。弱者共……そして知るがいい。結局最後には何も残らないことを……】

e p · 0 水龍の力 (前書き)

更新は遅い上に駄文ですが暖かい目で見守って下さい。

「ライト！そっち行っただわよ」

女性の声が大きく聞こえた。 辺り一面草原のこの場所、地平線の彼方まで草が続いてそうなオーストラリアのど真ん中にも言えるような場所で、明らかに銃刀法に引つかかる3人の人間と1匹のライオン……

「へっ、余裕だぜこんな奴……え？」

高らかに声を上げると、遠くからライオンが走ってくる。しかし、ライオンの大きさが此方に向かってくる程に大きくなってきている。

マジかよ……

気づけば見上げる程の大きさにまでなっていた。1 m、2 m、3 m……自分が小さくなったかのような錯覚さえ起こした。

“ライト”と呼ばれる青年は巨大なライオンが振り下ろす前足を間一髪回避する。

ライオンが外した前足は地面に突き刺さると同時にその場の地面を大きく抉りとった。

「なんだよこの大きさー！」

ライトは急いで所有武器の“大剣”を構えるが……

「え、まさかビビってるのライト?」

先程の女性の声が聞こえてくる。

「うるさい、サヤ。ちょっと大きいから驚いてるだけだ」

サヤと呼ばれる女性はものすごい速さで此方に走って来ている。人間の走力を軽く越えていた。それでもライトとは400mぐらい距離があるが……

「仕方ないさ、サヤ。ライトはまだ初めて間もないんだから」「なんだと、ジュン。こんな奴俺一人でだって」

とライトは勢いよく言うが、先程から巨大ライオンの攻撃をかわらうじて回避しているだけだ。それを見て、ジュンと呼ばれる3人目の青年は楽しんでいるように言った。

5

「まあ今回は俺に任せてときな」

「ジュン。そろそろロード完了する?」

「ああ、一気に片付ける」

「俺を仲間外れにするなああ」サヤもライトの近くまで来る。ジュンもどこからか颯爽と現れていた。

【1st set time: OFF skill ability

“滅龍能力：水龍の咆哮”

down load complete: use】

そう3人の頭にはデータがはつきりと流れていく……

「ライト、これが最近手に入れた俺の激レアスキル」

ドラゴンスレイヤー

【特殊ジョブスキル：滅龍能力モデル“水龍”】

「うわあ、ほんとに手に入れたんだ。100万に1人の確率でしか手に入らないランクSSSオーバーの激レアデータ。」

「俺も使うのは3回目だ」

ライオンが突進してくるが、ジューンは息を大きく吸い込む。

すると、ジューンの肺は大きく膨らんでいく。限界まで溜め込むと上体は大きく仰け反ると同時に辺りには水泡が浮き始めていた。

喰らえ。

【水龍の咆哮！】

ジューンは勢いよく溜め込んでいた空気を吐き出していくと、大量の空気と共に水が放たれていた。

その水量は5m近くある巨大ライオンを軽く飲み込むぐらいの量で、ライオンは圧縮された空気と超高压水流によって爆弾のような凄まじい破壊力を得た息吹に直撃し巨体を浮かしていた。

息吹を吐き出し終えた後、ライオンは後方に大きく吹き飛んで大きな地響きと共に地面に叩きつけられた。

ライオンの腹には息吹によってまるでドリルで貫かれたかのような痛々しい後が残っていた。倒れたまま起き上がらないので瀕死状態になったのだろう。

するとどこからか晴れやかな音楽が流れてくる。

【mission clear!!】

mission file

“草原に住む王者を討伐せよ!”

mission level 75

rank F

player ライト・サヤ・ジユン

bonus 70000G・王者の鬘・王者の角

ジユン様・サヤ様の2人様はplayer levelがmission levelを大幅に越えているためbonusを受け取る事が出来ません。

報酬はアイテムボックスに自動送信されます。

残り50秒……】

そう攻略完了のデータが流れると、ライトは腰を抜かしたようにしてその場に座り込んでいた。

「さすがにすごいな……あれが特殊能力か……」
ジョブスキル

「滅龍スキルだけが激レアな訳じゃない。このゲームの凄さを知るのはこれからさ」

「いいなあ。私も欲しいな滅龍能力！攻撃力高すぎ」

確かに、一撃でクリア出来るとは思ってた。さすがに激レアデータだけはある。

【levelup! player “ライト”様 level45

level50 称号：“金獅子狩り” get!】

「レベル上がったようだな」

「低いな」

サヤが言つとライトはふてくされたかのように黙り込んでしまった。

「最初はみんなこんなもんだぞ」

と労いの言葉をかけるジユンにライトは大きな声で言った。

絶対お前らよりやりこんで強くなってやる！滅龍なんて能力跳ね飛ばすぐらいにサヤ覚えておけ」

「頼もしいな」

「意地張っちゃって」

「げっ、もうこんな時間……明日テストだあ」

「うわっ、私また赤点だ」

「さあ寝るぞ」

こうして3人は草原から消えるようにして去って行った……

l o g o u t

e p · 0 1 データに支配された世界 (前書き)

本文です。

短めですが宜しく願います。

ep・01 データに支配された世界

それから深い眠りについた俺ジュンこと“夜鷹 潤”は当たり前のように明日が来ると思っていた……

何一つ変わらない日常。

再び来るログイン・ログアウトを繰り返す毎日。

だけど知らなかった。不幸はふとした瞬間に訪れて世界を一変させると……

今日が平和だったから明日も平和だなんて固定観念としてしか成立していなかったと。

だけど不幸になったのは世界じゃなくて誰でもなくて……

常に自分だけだった。

【second online：“new game” dow
nload：complete】

“人間”は強がるだけで弱い。
いともあっさりと簡単に死ぬ。
信頼という余地は無い。

残酷な世界にあっさり負ける。

だから与えよう。戦術を

生き残るチャンスを

そして知るがいい……

弱者がどれだけ力を得てどれだけ弱者を支配しようとも

最後には何も残らないのだと。

“夜鷹潤：online”

今日はあっさりと部屋で起きた。

いつもならたいてい二度寝に入るのだが、目覚めがとても良い。

俺の部屋はパソコン以外の家電はテレビぐらいだが今はついていない。

とりあえずベッドでしばらく横になっている。

時計を見てみると支度をするにはまだ早い。

携帯を取って見てみるが待ち受け画面は映らない。

「充電するの忘れたか」

携帯なんて日常使うことが少ないから充電なんて考えてなかったが
気のせいか……

とりあえず朝も早いのでベッドから立ち上がるとパソコンを起動さ

せてみる。

しかし、電源はつかない……

あれ？

とガチャガチャ整備しようとしてみるがコードもちゃんとかかっているし問題がない。

試しにテレビをつけてみるがやはりつかない。

「んだよ、停電かよ」

ついてない。こんな時に停電とは……
頭を悩ませていると……

「ピー！ピー！」

突然音が鳴る。

あまりに突然過ぎて体が一瞬ビクツとなった。

なんだなんだ？

とテーブルの上には何やら見たことの無い電子端末が置いてあった。

なんだこれ？

何やら腕に装着するタイプの物でボタンは無く横長の画面だけがタッチパネルっぽいのは見た限り理解できる。

こんなの持ってたかな？

だが、不思議とかつこよさを備えている電子端末を興味本位で左腕に装着してみた。

！
するといきなり画面がパツと光だして起動し始める。

【 個人情報再認識中。

心拍数・皮膚認識機能作動中 d o w n l o a d : 5 8 % 】

なんだ？心拍数皮膚認識？

何やらマズいことをしてしまった気分には陥る潤だが……

電子端末を外そうにも外れない。

そうしているとすぐにロード完了の表示が出た。

【 d o w n l o a d : c o m p l e t e

登録者名“夜鷹 潤”

：認識完了】

【 ヤタカジユン
“夜鷹潤”

p l a y e r l e v e l 1 5 7 7 5

職号： 龍殺の霸王

武器： 霸王の剣

防具： 霸王の兜

 霸王の鎧

 霸王の靴

 霸王の手袋

p r i v a t e s k i l l : 霸気

a c t i v e s k i l l

 神速

 神護

 神眼

m i s s i o n c l e a r 1 9 3

総殺者数 78
money 57,652,000
wanted 40,000,000

登録者状況：死亡】

「はっ……?」

何これと言わんばかりに電子端末の画面にはこう書かれていた。

何より引つかかるのは最後の死亡の文字……

しかしまたすぐに画面は切り替わる。

【 ヤタカシユン
“夜鷹潤”

player level 88

職号：新世界の滅龍能力者

武器： 無し

防具： 通常衣服

private skill： 滅龍能力

active skill 駿足・探知

mission clear 0

総殺者数 0

money 0

wanted 100,000

登録者状況：新規online】

すぐさまこの画面が映ると…

潤はすぐさま

「弱くなりすぎだろ」

ツッコミを入れてしまった。

だがこの画面表示には見覚えがある。
そう昨日もしていたゲーム。
エターナル・ワールド・ストーリー・フロンティア
と非常に似ている。

一体何なのかわからないが、ゲームのステータスで間違いない。

「意味がわからない」
頭を悩ませていると……

再び携帯端末が音を鳴らした。

ビクツと再び体を動かす潤。

この音には慣れそうにないな。

再び画面を見ると思わず目を疑った。

【 注意

他の人間があなたに対し戦闘の意志を示しています。速やかに戦闘準備を進めて下さい。

このメッセージは戦闘意志表示者があなたの半径100m以内に侵入すると表示されます。】

はっ！？戦闘準備？

もはや状況がつかめない。

一体どうなると言うのだ。

理解なんてできる訳ないが、万が一のことを考えてとりあえず外に出してみた。

路地で左右を確認してみるがまるで人影のようなものはないが……

なんだやっぱり間違……

と思った瞬間に、突如隣の家が爆発音をたてて崩れた。あまりに一瞬だったので騒音であることすら忘れていた。砂埃が消えると隣の家は半壊していていた。

「なっ……………」

凝視する俺……………」

半壊した家から人影が見えた。

その人間は此方に向かって歩いてくる。

「ういー。たくっ、家一つ間違えちまったまあわざわざ外に出てきたんだ。探す手間省けたぜ」

おっさんだ。しかも朝から酒を飲んでいる。

ただいつもと違うのは危ない物を持つてるということだ。

「別に恨みわないが、俺の酒代のために死んでくれ」

t o b e n e x t g a m e

e p . 0 1 データに支配された世界（後書き）

ご閲覧ありがとうございました。

e p・0112 (前書き)

基本的に3ページぐらいで進んでいきます。

短めですがご了承下さい。

【 只今より半径100m以内に戦闘許可区域が設定されました。】

潤の電子端末がそう表示されると、今まで生きてきた中で1番に殺伐とし緊張していた。

嘘だよな……

冗談だよな……

信じられ無いとしか言いようが無い。

昨日まで平和だった世界が1日明けたら戦闘許可？

どうかしているだろ。

「あんた若いが新規にしたら年齢が経ってるな、最近増えて困るぜ。年齢が高いと狩るのが大変なのよ」

短い髭が揃った顎を首の根元に当てこすりつけながら言う酒酔いのおじさん。

新規……ってなんだ？

すると、酒酔いのおじさんが自分と同じように装着している電子端末の画面を此方に見せるように差し出してくる。

「ほお、夜鷹潤って言うのか、かつこいいねえ」
関心するようにズバリ言い当ててきた。

はっ!?

まだ名前も名乗っていないのに何故わかったのだ？
事前に調べられていた感じもなかったが。

「ん？お前さん、新規のくせに特殊データを持ってるな。こりゃ使われたらめんどろだな」

特殊データ。そう言えば、俺には武器も何も無いが予め持っているものがあつた。

そして、酒酔いの男性は腰から“鎖鎌”を取り出した。

見た限りは手持ち用で小柄なタイプの物だが、刃は鋭い光沢を放ち殺傷能力がありそつだ。

【active skill：“瞬足” download:

complete:use】

機械音が丁寧に読み上げる。

まるで頭の中に直接流れ込んでくるようだ。

すると酒酔いの男性はまるで風になったかのような速さで此方に来る。

100m10秒なんてレベルじゃない。

【active skill：“剛腕” download:

complete:use】

再び機械音が読み上げる。

気づけばあっさり目の前に男性は現れていて、躊躇いもなく鎖鎌を振り下ろしてきていた。

ここまでの流れが約数秒の話である。

「わあっづー！」

と意味不明な声を上げてとっさに横に回避する。

背後はたまたま壁でコンクリート塀。普通にいけば鎖鎌をぶつければダメージを与える結果になるが……

現実とは違っていた。

爆発音に近い轟音と共にコンクリートの塀は鎖鎌、男性の筋力によって簡単に破壊された。

横目で見ただけでも衝撃的すぎて腰を抜かしそうになる。

「俺も生活がかかってるんだよ。苦しめたくないんだ、だから諦めて死んでくれ」

何を言い出すかと思えば、自分が生活するために人を消す。頭狂ってるのかとしか言えない。

【OFF skill ability “鎖鎌の鉄槌” down
load: 26%】

【active skill: “剛腕” lost】

先程と感じが変わって読み上げられる。

down load 数値は少しずつだが今も上昇していた。

直感だがヤバい気がする。

もし、この世界がゲームのような世界だとしたら。今の表示は必殺技のカウントになる。

非現実的過ぎるが、嘘にしてはリアル過ぎる。

此方も応戦しなければ数十秒後には確実にやられる。

潤は焦りながらも電子端末をいじっていた。

打開策は……

俺に何か力は無いのか？

武器なんて無いんだぞ、こんな理不尽な戦いがあるわけない。

すると頭の中に機械音が流れる。

【長考時間が30秒経過致しました。手動モードから念動モードに変更します。

privateskill:滅龍能力をご使用為さいますか?】

便利だ。ようするに頭の中で考えて選択できるようだ。

これなら……

すかさず潤ははいと念じる。

【privateskill:????? down load:15%】

と音声再び流れた。ただskill名がノイズで消されたのか聞き取れなかった。

「privateskill。能力者だったか。マズい何かする気か？だが少し気づくのが遅かったな」

【OFFskill ability：“鎖鎌の鉄槌” dow
nload:complete:use】

頭の中に表示される。

一瞬はつとした。

男性は鎖鎌を地面に叩きつけるとそこから地割れを起こすように衝撃波が此方に向かって来ていた。

まるで地面から生えた空気のギロチンが襲いかかってきているようだ。

だが回避可能だ。

潤はタイミングを見計らって回避する。

【active skill:瞬速・剛腕
download:complete:use】

え？

視線の前には男性が拳を振りかざした状態で目の前にいた。

そのまま顔を殴りつけられるとあまりの衝撃の強さに一瞬意識が飛んだ。

気づいたら目の前に真っ赤な空が広がっている。

まだ朝のはずなのに……

すぐに背中に痛みを感じた。

やっと自分が空を飛んでいた事に気づいた。

頬が痛い……

熱い。焼けたように……

立ち上がれなかった。

そして無情にも頭に表示される。

【private skill:滅龍能力 down load:
92%】

ふっ、長いんだよバーカ……

ゆっくりと数値が伸びている。だがもう痛みが強すぎて戦え無い。

男性は倒れた此方を見て言った。

「あんな技普通にやったって当たりやしねえ、だったら罠に使った方が楽なのよ。俺も人間として心が痛むぜ、動け無くなった相手にトドメを刺すのはよお、だがわかってくれ。せめてあの世では平和を願ってくれや」

ああ、いきなり訳もわからず死ぬのか……

【 只今戦闘許可区域に戦闘意志表示者が乱入してきました。】

男性も潤もこの表示に驚く。

わざわざ自ら戦闘しに来る者がいるらしい。

と言ってももう動けないのだが……

【 戦闘意志表示者のplayer levelがあなたのplayer levelと1000以上の差があります。速やかに戦闘回避する事をお勧めします。】

「なんだと!?1000!」

男性は本気でヤバいと悟ったのか俺を見捨てて逃げようとし始めた。

瞬速で逃げようとするが……

【OFFskill ability: グングニル 戦神槍LV4” do
w n l o a d : c o m p l e t e : u s e】

表示と共に音声流れる。

「ぎゃあああ!」

と男性の悲鳴が鳴り響いた。

潤が道路に設置されたサイドミラー越しで様子を見ると、男より長い槍が腹を貫いていた。

男は血を吐きながらゆっくりと倒れる。

そして民家の屋根の上で男性がゲラゲラと爆笑している声が聞こえた。

「はっはっはっ。傑作」

サイドミラー越しに見ていると笑っていた男性が瞬間移動したように倒れた男性の前に現れていた。

誰だ……

「たくつ、テメエ俺の友達を殺しかけやがって」
倒れた男性をあざ笑いながら蹴る。

「酔っ払い如きが俺の友達に何したかって言ってるんだよ！」

友達……？

「すみませ……じた」

凄い剣幕で怒鳴りつけると何度も蹴りつけていた。

男は意識を失う。

「だらしねえ」

すると青年は電子端末を倒れた男に向けて何やらしていると

「はっ、懸賞金400000、新人狩りかほんと弱い上に考える事も低レベルなカス野郎だな」

暴言を吐きながら、青年は刺さっている大型の槍を無理やり引き抜いた。

いきなりで痛んだのか男が意識を取り戻す。

青年は呻く男性に言った。

「ゴミが」

槍の先端の刃であっさりと頭を貫いた。

思わず目を逸らしてしまっただが残酷極まりない。

そして青年はゆっくりと此方に向かってきた。

そして、優しい口調で言った。

「遅くなってごめんな。潤、すぐ治しやるから」

この声、聞き覚えがある……

潤は緊張が解けたのかそのまま意識を失った。

“
ライト
”
……

「うっ……うっ……」

ゆっくり呻きながら目を開けると、コンクリートの天井が見えてくる。

酒代のために死んでくれ……

一瞬にして襲われた時の事を思い出す。

そしてその場から飛び起きるようにして起き上がった。

左腕には謎が多い電子端末がしっかりと装着されている。

あれ？

頬を触ると殴られた痕がまるで無い。

こんな馬鹿な事は無い。あの激痛は間違いなく本物で、簡単に治せる程度ではなかった。

だが、今は一切の痕も無い。

治療とかのレベルで無いのは間違いなかった。

いきなり部屋の扉が開かれた。思わずビクッと反応してしまったが、現れたのは……

「起きたか。潤」

間違いない。

“ライト”…… “月宮翔”

何故だろう、ものすごく遅しくなって大人に見える。
筋肉があるからだろうか。
だが本人だろう。

潤はつい涙を流してしまった。知り合いがいると落ち着いてしまうのは人間だからだろうか。

「泣くなよ、っていきなり襲われてりや泣きたくもなるわな」翔は頭を掻いた。

そうだ。俺はどうしても聞きたいことがあったのだ。

「なあ、翔。信じてくれるかわからないんだが……俺は目覚めたらいきなり襲われて……なんて言うか。世界全体が違うんだ！俺が生きている世界が違うのかな？もつと平和で……」

一生懸命説明しようとしたが、言葉にできなかった。
当たり前だが……

だが翔は意外な反応を示した。

「わかつてる」

そう言ってくれた……

「一体ここはどこなんだ。俺はなんでこんな変な違う世界に来てしまったんだ」

錯乱するのも無理はなかった。ただ、翔は優しく言ってくれた。

「まあ、落ち着けよ。話すことは山ほどあるんだ」

「ああ、すまない。やっぱり信じられなくて」

「飲めよ」

差し出してくれた温かいお茶を渡されるとゆっくりと喉に通した。

「まず一番最初に伝えるべき事を話そう。お前は選ばれたんだこの世界に……」

選ばれた？

一体なんのために？

「この世界にも、お前“夜鷹潤”は存在していたんだ。だが、この世界のお前はとても強かった。そして一年も前だが……missionで命を落としたんだ……」

mission？

強かった？

「おかしいぞ、この世界の俺は死んでなんで違う世界の俺がまた一年後にこんな世界に来たんだよ」

人の人生は一度きり、それが神の摂理であって変えられないルールのはずだ。

「すまない。俺にもわからなかったんだ。まさかこんな結果になるなんて……巻き込むつもりはなかったんだ。俺も今日潤の家から生存反応が出た時は驚いたよ。だから俺はなんとしてでも潤を守るさ」

「元の世界に帰る方法は無いのか……」

「すまない」

「くっ……」

「だがなつちまったもんは仕方ないし、ここに平和な世界から来たお前がいるならそれはもうお前の問題だ。生き延びるために戦うんだ」

「戦う……」

だが喧嘩もろくにした事無いのに……いきなりあんな殺し合いなんて不可能だ。

「無理に決まってるだろ」

「いや、お前のいた世界なら不可能かも知れないがこの世界にはこれがある」

見せてきたのは電子端末。

確かに謎めいた機械だが……

「デバイス。俺達はそう呼んでいる。魔法を使う媒体。平たく言えば人間を強化できる人類唯一無二の武器だ。お前も見ただろう。人が強化された瞬間を……神は俺達に力をくれたのさ」

「力……」

人類に与えられた力。

それがもたらしたのは平和じゃなかったというのか。

「俺は一体これからどうすればいい……?」
頭を落として、悩むしかできなかった。

「しばらくはここにいといるといい。俺がこの世界での生き方と、力の使い方。何でも教えてやるからよ。そして何より安全だからなここは」

そして翔は潤の頭の上に手を置いて

「ってここ作ったのはお前なんだけどよ」
笑いながら言っていた。

「まあ今日は休め、明日いろいろ紹介してやるよ」

そう言われて部屋を去った翔。

だが、そんな世話になる訳にはいかなかった。

このままだと、強いこの世界の翔に頼りきった生き方をしてしまうだろう。

いきなり訳のわからない世界に現れて足手まといになるつもりは無い。

自分が生きる方法は自分で見つける。

「出発は深夜……」

潤はしばしの間仮眠をすることにした。

すっかりと夜がやってきた頃、潤は靴ひもを結び直して、立ち上がる。

扉をゆっくり開けると廊下に出た。

全てコンクリートでできた壁だ。

窓は無く、こんな時代に火で灯りがつけられている。

長い……

そうとうな広さを思い浮かべた。

窓が無いことから地下にしていると推測できる。おまけに換気扇の数が

多い。

しばらく歩いていると一室から声が聞こえてきた。
しかも複数だ……

「おい！あんな得体の知れない奴連れてきてどっいう口だ」

「あいつは間違いなく潤だ。面影だけじゃない、友達の俺にはわかる」

「馬鹿言つな。あいつは……間違いなく一年前俺達の目の前で……」

「そうよ！違う世界から来たなんて有り得ない。新規な上にレベルも低いじゃない」

「仮にあれが潤だとしても、何のためにきたんだよ」

「それがわからないんだ。」

「ちよつと、最近霸王軍がウチらに目つけてるの知ってるの？最近じゃ奴らも……クラス狩りしていずれmissionになるんじゃないかしら

「霸王か……最近動き出しているな」

潤はエレベーターを見つけると乗り込んでとにかく上に上がっていった。

気づけば綺麗な内装になっていて新品さを伺える。

そしてエレベーターの扉が開くとそこは体育館の倉庫だ。

物置に間違いない。

跳び箱やら平均台やら積み込まれている。

じゃあここは学校か……？

恐る恐る倉庫の扉を開けると、体育館に出た。

しかもよく見覚えのある内装だ。

バスケットボールを楽しんでいた気がする。

杉羽第二高校。

潤が通っている学校に間違いなかった。

それにしても、これから先どうすれば良いのか検討もつかない。

目的という目的が無いのだ。

RPGの基本はラスボスの討伐だがそれも無い。

まず元の世界に帰れる手段も無い。

そういえば、ここに来る以前にしていたオンラインゲームでもメイ
ンストーリーはやってなかったな。

ひたすらレベル上げと、mission。

だが今は初期レベルだ。外に出てまた襲われたら今度は本当に死ぬ
だろう。

「やっぱりな、こんなことすると思ったよ」

!!
暗い体育館のステージの上で座りながら言ってきたのは、助けてくれた翔だった。

「昔からそうだったもんな。何でも一人で抱え込もうとする癖。お前やっぱり潤だな」

「翔、俺は……」

「関係ない。お前がこの世界の人間じゃない事はハンデじゃない。最初は辛いかも知れないがお前の本質は異世界共通だ」
思いつき笑顔で言ってくれて潤は翔の逞しさに感動した。

ピー!!ピー!!

突如としてデバイスが振動し甲高い音を鳴らした。

「まさか!」

翔も同じようにデバイスが反応している。

【advance mission】

内容〓目標の討伐

mission target 《幻の虎人》

profile: 狂暴・とても速い

skill: 人化・獣化

attack: とても鋭利な爪と牙

like: 人間の肉。ねこじゃらし

mission player x 4

強制参加です。

【受信拒否されません。】

「何だこれ……」

だが、翔を見ると明らかに顔が青ざめている。
嫌な予感しかしないが……

すると、体の一部から消え始める。

「なんだよコレ!!」

消えていく体に動揺を隠せない……

「大丈夫。転送されてるだけだ」

転送??

なんかの漫画でしか見たことないが……

数十秒後……

2人は体育館から消えていなくなった……

【mission start】

ep・01-4 (前書き)

開いてくれてありがとうございます。
ついに戦闘シーンページ多めです。

閉じていた目を開くとなぜか住宅街に出ていた。

近くには大きな公園があるだけで他はただの夜の外だ。

転送されたというのは驚いたが変な所に飛ばされなくて心底良かった。

隣には翔もいる。

レベル1000越えの激強の翔がいればとりあえず問題ないはずだ。

だが心の他翔を見ていると少し緊張しているようにも見えるのは不思議だ。

そして他には、2人知らない人が同じように転送されてきていた。

mission player x 4とは参加人数を示すものらしい。

「君たちも呼ばれたんだね」

と眼鏡をかけた太っ腹のおっさんが話かけてきていた。

もう1人は痩せ型だがあまり強そうには見えない。

「ひゃあ、君凄いな。レベル1000越えてるなんて」

痩せ型のおっさんが驚いたように言うと、太っ腹の方も眼鏡をズラして関心していた。

「潤、試しにデバイスの画面を向けてみな」

翔に言われるがままに、潤はデバイスを太っ腹のおっさんに向けてみる。

【 “渡辺和人”

player level 335

職号： 銃器好きのヲタク

武器： レーザーショットガン

防具： 迷彩服（上下）

眼鏡

active skill：透明化・狙撃術（小）

mission clear 10

総殺者数 12

money 152,000

wanted 290,000

登録者状況：太り気味】

うわっ。個人情報保護法を軽く無視してる。

そして理解する。

酒酔いのおっさんが俺を見て名前を当てたのが、こっぴつことだったらしい。

【 “多田勝”

player level 297

職号：銃器好きの友達

武器： レーザーハンドガン

防具： 黒のスーツ

アタッシュケース

active skill：弱点解析・狙撃術（小）

mission clear 9

総殺者数 8

money 252,000

W a n t e d 250,000

登録者状況：最近全然太らない】

うわぁ、面白い。

人間図鑑にでもなりそうだな。

「君はハズレだね。とりあえず死なないように隠れてなよ。しかも武器を持って無いつて話にならないし」

嫌みそうに言ってきたのは痩せ型の多田だった。

潤のデータを見たのだろう、レベルの低さは確かにありすぎる。

それを聞いた太っ腹の渡辺は、武器であるレーザーショットガンを構えながらカシヤんとセツトする。

「なんだよそれ。その歳でmissionoの新規かよ。今まで何してたんだ？ニートかよ。そうだコイツ困にしてあいつらを引きつけさせようぜ」

ゲラゲラ笑っていて言われて苛つくが確かに言ってることは間違いない。ニートではないけど……

「おい、クソ野郎」

渡辺の首筋には槍の刃先が向けられていた。そして翔がものすごい形相で脅していた。

「おおっ、怖い怖い……俺達仲間だろ」

「次潤に悪口言ってみろ。仲間だろうが容赦しない」

真剣な表情に冗談とは言えない。

殺気立つ翔だが、落ち着きを取り戻す。

【 “月宮翔”

player level 1855

職号： 風帝の神鎗使い

武器： 戦迅鎗グングニル

防具： 軽雲の鎧

疾風の靴

螺旋の鉄手袋

active skill:

迅速（自動）・貫通（中）・跳躍力強化

mission clear 48

総殺者数 55

money 958,000

wanted 1,240,300

登録者状況：潤を守りたい】

すごい……

翔のステータスはゲームみたいな感じだ。

だが、翔の服装を見る限り、鎧を着ている感じではない。

普通に黒いジャンパーにカジュアルなジーンズだ。

「おい、いたぞ……」

4人とも渡辺の言葉に緊張感が一瞬にして高まった。

《幻の虎人》……

70m先ぐらいの遠くには人がゆっくりと歩いていた。

あれがそうなのか？

普通の人にしか見えないのだが……

ピーピーピュピュ……

高速でエネルギーが収束されていく。

「俺がもらった」

渡辺がショットガンのトリガーを引くと、一直線に光線が飛んでいった。

一瞬にして光球が広がると、辺りは瓦礫の山になっていた。

本物の兵器だ。

あんなのが当たり前のように存在するこの世界。

人に当たればひとたまりもないだろう。

というか。さっきの人は本当にターゲットだったのだろうか……

「やったか……」

【 目標に命中しませんでした。 】
頭の中に表示される。

【 討伐目標が戦闘の意志を示しています。速やかに戦闘準備を行
い下さい。 】

この表示は討伐目標が50m以内に侵入すると表示されます。】

！！

人影がこちらに勢いよく走ってくる。

「ヤベツ、こつち来たぞ」

多田がハンドガンのトリガーを引く。

ショットガンのように光線ではなく単発のレーザーショットだ。

しかも気のせいかわ4本脚で動物のように走ってきている。

見間違いか……？

光線は目標には当たらない。ジグザグに回避しながら多田の所に近づいている。

そして数秒後には、多田は悲鳴を上げて後方に倒れ込む。

「だ……誰か……助けて」

多田の上には押し倒すようにして灰色の虎が首筋を狙って飛びついていた。

多田は必死に手で抵抗する。

助けようにも、ショットガンで打てば多田も巻き添えを食らう。

「うああ……ああ!!」

力負けした多田は灰色の虎について首筋を噛まれる。

悲鳴をあげるが出るのは赤い血ばかりで

ジタバタしながら抵抗するが虎は器用に噛みきっている。やがて、動脈にまで達したのか最後は大量に血を吹き出し多田は絶命した。

潤はその姿を見て思わず嘔吐した。

「潤！」

人が目の前であっさり死んだ……

武装しているのにも関わらず……

死んだのだ……

「野郎……でかいの喰らいやがれ」

【OFF skill ability：“四方光線”

down

load:use】

トリガーを引くと、4本の光線が上下左右の起動で曲がりながら飛んでいった。

【OFFskill ability: “戦神鎗Lv4” do
wnload:use】

螺旋回転する翔の鎗。虎は2人の技に気づいて一瞬にして離れる。

だが、鎗は追尾するように回避した虎に襲いかかる。

さすがに驚くが次は一瞬に人になって回避した。

見た目はロン毛の男性だが目はネコ科特有の目をしており、虎の面影が残っている。凶太い牙を生やしていて殺傷能力は高そうだ。

「なんだコイツ」

人の姿になれる虎に驚きを隠せない。

渡辺はショットガンを構えている。

「特大をお見舞いしてやるぜ」

【OFFskill ability: “破壊光線” down
load:use】

ピーピーピー……ピーピー

焦点時間が長いが、攻撃力の高いものが予想できる。

ショットガンを前に構えてトリガーを引こうとした。

!!

次の瞬間の映像はレーザーが発射される光景ではなく、渡辺の腕が

血とともに空中を舞う。綺麗に切断された腕からは血が流れ落ち続け、肉の内にある骨まで丸見えだった。

しかも不運なことに空中でショットガンは渡辺の顔に向けられた状態になってしまい。そのまま破壊光線が発射された。

威力は通常の数倍の太さの光線で声を出す余裕すらなく渡辺の上半身が吹き飛んだ。

そして間もなく絶命し、その場に倒れた。

虎人間は渡辺の背後にいて手から出た剣のような鋭さを持つ爪が血で染まっていることから斬られたのは明白だった。

速い。

人間の時の方が動物の時より数倍速い。

この虎めっちゃ強い……

「潤、覚えておいて欲しい。player levelは人間の間では力の優劣を決める基準になるがadvance missionの時は優劣は無くなる。いくら強くても成功するとは限らない。逆にいくら弱くても成功しないとは限らないんだ」

一緒に戦う。

そう言われてるような気がした。

何か自分にもできることはないのか……

「まずは、動きを止める」

翔は槍を片手に物凄く速い走力で間を詰む。

槍を脚に突き刺そうとするが、虎は爪で弾き返した。

【OFF skill ability：“千鎗捕縛”
load：use】 down

空中から数百モノ槍のような棒が虎人間を突き刺そうとして雨のよ
うに降り注ぐ。

近接戦闘に集中していた虎人間は不意をつかれて身動きがとれなく
なる。

「よし……」

俺も戦わないと…

すると頭の中で音声が流れた。

【private skill：滅龍能力・水龍 down l
oad：complete：】

前回down loadを溜めていたので今回は使えるようだ。

よし……これにかけよう。

潤は覚悟を決めて頭ではいと念じる。

【了解致しました。】

すると潤の体からほとばしる威圧が突風を生み出した。

！

「潤……?」

【private skill: “滅龍能力”】
ad: us [e] down 10

e p . 0 1 - 1 5 (前 書 き)

開いてくれてありがとうございます。

凄い気迫と言われないばかりのオーラを大量噴出していた潤。

サイクロンのような竜巻が潤を覆い隠す。

翔もその事態についていけなかった。

そして、凄い風圧が四方に発生しサイクロンをあとかたもなく消し飛ばすと立っていたのは凄まじいオーラを纏った潤だった。

こんなにも強い虎人間が潤の威圧に恐怖しかけている程だった。

潤の姿にも異変がある。

まず体格は一回り大きくなった。大人っぽくなったというべきだろう。

筋肉もついている。

そして服は裂けて腕が露出しているが両腕とも鱗のような痕が浮き出ている。

口には犬歯が牙になるような成長を見せている。

髪は長くなった。短髪の潤が今や肩まで伸びている。

目の前にいるのが別人とも言える程の友が翔の前にいた。

「ふふっ、すごい。力が溢れてくる！なんだよコレ。これがスキルの力か。さっきの奴らがゴミみたいな感じるぜ」

高笑いする潤。まるで悪魔から力を得たように人格が変わったような気さえした。

翔は知っている。昔から潤は才能があるのだ。戦闘訓練をすれば当たり前のように弱点を見抜く。

そう、人より上に立てるといふ才能。

今回もその結果と受け止めるべきだろう。きっと違う世界の潤も同じなのだろう。

ならば彼は奇跡の力とともにこの世界を救いに来たのではないだろうか……

あの男を倒すために……

「ギャンー!!」

と気づけば捕縛から逃れた虎人間が一目散に戦闘回避し始める。

翔ですら感じたことの無い威圧だ。

何か強大な何かを潤の背後に感じる。

【討伐目標が戦闘回避を始めました。

1km以上の逃走でmission失敗】

翔ですら足が動かない。

「はっはっ、負ける気がしない。今の俺は最強だ!」

【active skill: “翼脚” down load: use】

次の瞬間、まるで背に翼が生えたかのように空中を風のように通過する。

今まで多数の移動skillを見てきたがこの移動方法と速度は見たことがなかった。

あっという間に虎人間の目の前に現れた潤。遠くから見ても蛇に睨まれた蛙のようだ。

人型になると、逃走を諦めたのか鋭利な爪を剥き出しにしてきた。

人間の肉を軽く切断できる鋭利な爪。

プラスチックの爪に見える。

虎人間が腕を振りつけて来るが、まるで潤には物足りないかのように回避する。

見ている側からすれば凄い速さで斬りつけられているが、まるで当たらない。

「ははっ。どうした？なら……」

「潤！」

すると潤は回避するのをやめて真正面から受けた。

が、虎人間の爪は何事もなかったように潤の体に弾き返される。

まるで鉄を斬ろうとしていたような感じだ。

「逃げて損した」

次は潤が虎人間に殴りかかる。

速さを誇る虎人間なら拳を回避することは容易いはずだが、結果は

違っていた……

鈍い音が潤が拳を振るう度に鳴り響く。

虎人間の顔も殴られる度に傷ついていく……

「タ……ケタ……」

興奮しているのか潤は構わず殴り続ける。

「弱いんだよ。どうした、かかってこいよ」

「タ……スケタ」

「命乞いか？」

もう虎人間は血まみれになっている。

耳からも流血していた。

うつむきひたすら命乞いする虎人間。

「潤……」

「翔、さっさと終わらせようぜ。俺の力見せてやるよ」

ペキペキと音を鳴らしながら潤の右手が鋭利な手へと変化する。

【OFF skill ability：“水龍の貫爪” d o w
n l o a d : : u s e】

もう戦意の無い虎人間は棒立ちのままだった……

ここまでくると弱い者イジメである……

水を纏ったその鋭利な右腕が、虎人間の首をあっさり貫いた。

大量の水が鋭利な刃と化して首を切断する。

貫いた後に飛び出る水は赤く染まっていた……

【 ヤタカシユン
夜鷹潤：能力解放時”
player level 12542
職号： 異世界の滅龍能力者
武器： 無し
防具： 龍の鱗
private skill：滅龍能力・水龍
active skill：翼脚・龍眼
mission clear 1
総殺者数 0
money 113,000
wanted 400,000,000】

登録者状況：めっちゃ強い】

翔がデバイスを見て絶句していた……

この変化の仕方は一体……
level一萬越え……
ケタが違っていた。
前例の無い変化。private skill所持者は能力を使用
するとステータスが全体的に上がる特徴を持つが……

いくらなんでもバグレベル……

こいつは本当に……

【 mission Clear
月宮 翔 5 point 85 NEXT 23
夜鷹 潤 48 point 48 NEXT 50

bonus 100000円

転送開始します。】

【level up 夜鷹潤

84

113!!

new skill “鋼鉄” get!!】

「見たかよ翔。俺が化け物倒してやった」よっぽど気持ち良かったのか潤は歓喜の声をあげていた。

「すごいな。あんなの見たことなかったよ……潤が能力者だったなんてさ。悪いけど話たいことがある。戻ったら出て行かないでくれないか」

潤の可能性を見た翔はあることを決意する。

実現する。世界の革命を……

こうして2人は姿を消したのであった。

薄暗い体育館に2人はジリジリと音を立てながら再生されるように転送される。

既に科学の域を越えているが何よりも力とは素晴らしいと潤は感じていた。

「結局なんだったんだ？missionってこのことか……」
潤が尋ねると翔は説明する。

「advance mission。通称特殊性強制mission。何が目的もわからず、いきなり通知が来てさつきみたいな得体の知れない化け物どもと戦わされる。倒した内容でpointが与えられ一定のpointを得ることに新しいskinnerが与えられたり、何か力が与えられる。いつ呼ばれるかはランダムだけど年に7回呼ばれたら多い方。でも確実に人類の人口は減少し始めている」
「なるほど。で、こいつは？」

目的不明の戦闘……

この世界では戦いが日常化されているらしい。

潤はデバイスを指差した。

「詳しいことはまだ多くは知らないが、この世界を支配する何かによって人間に1人1台与えられる機器。データと呼ばれる多種多様な能力をセットすると現実に表せる装置だ。こいつのせいで、世界は簡単に混乱に陥った」

「この世界を支配する何か？」

「俺達もわからないがこの力をくれている神様にあたる存在」

神様……

【あなたに通信を許可を求めている者がいます。通信致しますか？】

いきなり翔のデバイスが鳴る。

通信機器としての機能もあるようだ。

デバイスはテレビ電話のように画面上に相手の顔を映し出した。

『こちらオペレーター室。招集場所からどこに消えたかと思ったら

さつきmissionの通知が着てたって、心配したじゃない。』
女性の声だ。

「ああ、心配かけてすまない。用件は？」

『ええ、そのことだけど。今また新規の者が学校の近くに現れたの』

「!」

どういう事かわからないが……

「わかった。今すぐ確認してみる」

『場所は杉羽市8条……』

ん？近くなのか……

通信を切ると

「悪いが一緒に来てくれ。事態はコトを急ぐ」
すると翔は走りだす。

基本的にバトルモードに入らない限りskillの使用ができないため速く走ることができないらしい。

「おい、一体なんだって……」

「最近増えてるんだよ。新規って言われてる奴らが、そいつらは何故か不特定にいきなり現れるんだ。まるで記憶を失った人間のように……」

「それってまさか……」

「ああ、潤もこうやって助けに行ったんだ。新規の奴らは新人狩りにやられて手遅れだったっていうのもよくあるからな。新規の保護は俺の統括……一刻を争う」

【 500m先戦闘許可区域が指定されています。】

!!

2人は顔を見合わせながら走る。

「急ぐぞ！」

また襲われているかもしれないんだ。
俺みたいに……

【 戦闘許可区域に侵入しました。】

e p · 0 1 1 6 (前書き)

聞いてくれてありがとうございます。
人気よりも完結することが今の目標です。

戦闘許可区域" skill使用可能

すぐさま翔は早速スピードを上げる。

“迅速”の自動発動skillを持っているため読み込みの時間が無い。

その分誰よりも速く動くことができる。

まだかよ……

デバイスを見ながら走る潤。

ただ、潤にはどうしてもこの地域について気がかりなことがあった

……

【active skill：“瞬速” download：
use】

よし。

潤も一気に加速する。

戦闘許可区域では頭の中に区域内の地形が表示されるため基本的に道に迷うことはない。

それにmissionで忘れていたが、“クラス登録”と呼ばれる簡単に言えばチームを作る機能があり、任意の内に登録するとクラス内のメンバーの所在地を知ることができる。

翔はここに来る前に潤とクラス登録を取り交わした後である。

【 戦闘意志表示者があなたの player level と 10000
以上離れています。 戦闘回避することをお勧めします。 】

路地を抜けると民家の前に出たが……

!!

翔と潤は絶句した。

間違いない。ここは……

「この家って……」

「潤どうした？」

翔はなんの事かわからないらしい。

たが変ではないだろうか。

「サヤ……」

間違いない。

幼なじみ“サヤ”こと、“清水 紗弥加”の家だ……

一瞬潤には嫌な想像が広がる。

自分も家にいたのだ。

もし同じなら来たのは紗弥加もしれない。

「まさか、潤。知り合いか!？」

コクリと頷く潤を見て翔はすぐさま、辺りを探す。

潤も必死になって人を探した。

まだ戦闘許可区域である以上必ず近くにいるはずだ。

見つからないと言うことは、犯人もろとも隠れている可能性がある。

「絶対見つけだす。間違いない紗弥加だ」

根拠は無いのだが嫌な予感しかない以上仕方ない。

「おかしい。こんなに捜しても見つからないなんて……」

ここである仮説が潤に出た。

人間必死になると閃くものだ。

「そういえばmissionの時に、skillで透明になれるスキルがあつたよな」
ハツとする翔。

すると……武器である戦神鎗を取り出したというより召喚した。

「世の中の武器にも能力が付加されてるのもあるんだ。俺達は能力付加武器を“レア武器”って呼んでる。戦神鎗もその一つでな……」

翔が鎗を振ると、光輝いた鎖のようなモノが飛んで行った。

「戦神鎗は戦闘許可区域にいる人物1人を指定し戦闘回避を不可能にすることができる。ただし、それは俺の方にも有効で勝敗がつくまで逃げられない。勝負好き俺には愛着の能力さ」

どうやら異世界共通なのは俺だけではないらしいな。

そして、近くで枷がはめられたような音が聞こえた。

「かかったな」
すぐさま行ってみると、道端で首輪が宙に浮きながら激しく動いている。
人間が首輪を無理やり外そうとすると想像できるとわかりやすかった。

【active skill：“光学迷彩” lost】

電気が飛び散るような激しい音を立てていると、次第に透明だった体が薄れながらも見えてきて、ついには見えるようになった。
出て来たのは、若い男性だった。

予想は当たっていたようで、skillによるものだったらしい。

それより潤は近くに倒れていた人を見て驚いた。

「やつぱり……」

紗弥加だ。

気を失っているのか、ピクリともしていない。

「おい、お……お前らこんなことしていいと思ってるのか、俺はあの“森羅万象”のい……一員だぞ。こんなことして……」

見た目チャライと思ったが態度はビビリ君のようだ。

そっぴいえばこんな奴いたなあ。

だが横にいた翔が敏感に反応した。

怒りより殺意に近い感情が表されている。

「吐け……森羅万象の知ってることは全て。言わないなら即座に首を跳ね飛ばす」

「待てよ。冗談だよ。だけど俺は本物のやつに会ってお前にこう言

えって言われたんだって本当だよ。それよりあんたらもその新規の首狩りに来たんだ……ろッ」

あまりに一瞬過ぎた。

戦神鎗の切先には血がへばりついていて空中に生首が舞っている。胴体はふらつきながら噴水のように首から血を吹いて倒れた。

速い……

疾きこと風の如く。

風林火山の風を表すようなそんな速さだ。「翔！」

だが一体なんだかわからない。

森羅万象と名だけでここまで取り乱すなんて……

「ウッ……」

急に潤は気持ち悪くなった……

死……

また死んだのだ……

気づくと嘔吐している。

だが翔は気づかなかった。

【player win “月宮翔”

point 1 NEXT 22】

「もしもし、こちら翔。目標の保護完了。並びに森羅万象からのメッセージを確認」何やら通信し始める翔。だが目つきは人間ではないぐらい鋭い。今にもブチキレそうな勢いだ。

拳を握りしめながらメッセージを翔はゆっくりと言った。

「。。」
「了解。」

【あなたのclass内に所属するメンバーがclass field skillを展開しました。】

「潤、大丈夫か……その娘抱えてくれ」

「えっ、わかった」

言われるまま紗弥加を抱える。

「本なら近場でこれは贅沢だつて言われるんだけど、今日はmissionもあつたのを考慮されたいらしい」

【class field skill：“転送” start】

すると翔と潤の体は転送されるように消えて行く。

最後に潤は見た。

首を跳ねられた男性の近くに残されたメッセージ……

そこには真っ赤な血で書かれ、残されていた……

1ヶ月後、お前らを潰す。

森羅万象より。

ゆっくりと転送されてくる潤と翔。

相変わらず転送は体がつくられていくようで気味が悪かった。

それより現れた場所はモニターやらパソコンやらが並べられ何十人もの女性が何やら作業している未来的なステーションのような所だ。「お帰りなさいませ」

と転送されてきた2人に声をかけてきたのは翔と連絡を取っていた女性だ。

モニター越したとわからなかったが美人だ。

「医療班をすぐに」

するとすぐにタンカーを持ってきていた医療班が颯爽と紗弥加を連れて行った。

あまりの手に呆然としているだけの潤。それにしても会社のような作業効率だ。

時間的には深夜のはずなのだが……

「それと、天城様が潤様を連れて来いと的通達がございました」

「わかった。すぐに行く」と伝えてくれ」

去り際に翔は女性にそう言うのと優しく抱いた。

いきなりの展開に思わず目を背けてしまったが……

こういう関係だったのか。

そしてステーションを出ると、廊下に出た。

「安心しろ潤。ここは体育館倉庫の地下だよ」

「嘘だろ、広いんだな。俺がいた所は独房みたいだったのに」

「あ、すまない。あれは手違いでな。次はしっかりとした部屋用意してるから何せ忙しいから」

「なんか有名会社みたいだったな」

「へへっ、ならいいことを教えてやるうか」

翔は俺の頭に手を置いて言った。

「その有名会社の社長はお前なんだぜ」

!!

「えっ!!」

さすがに驚いた。一体この世界の俺は何してたんだか……

「と言っても今は違うやつが引つ張ってくれてるんだけどな。んで今から会いに行くのがトップ2の天城優介。ちよつと初めてのやつらは怖がるけどな。慣れたら大丈夫だから、実際お前も顎で使ってたしな」

クスクスと笑う翔だが潤は面接のように緊張していた。

エレベーターでかなり地下を潜っていくと、BF48 と表示された。MAXは50らしい。

エレベーターから出ると数m先にデカイ扉があるだけであとは何も無い。

2人は扉の前に来ると

「翔です。潤を連れてきました」

「入れ」

と無愛想に返事が返ってきた。

入ると校長室にも似たような、デスクと社長イス、背面に外のようなモニターがあるだけの簡素で贅沢な作りの部屋に出た。

そして座して待ち構える翔と同じぐらいの男性。

目には傷痕が残っていて片目が開いていない。

「やっと来たか死にぞこないども」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3329y/>

second online

2011年11月28日00時01分発行